# 令和7年度　県立家島高等学校　学校評価

分野（Ⅰ 学校全体・組織・運営　Ⅱ 学習指導　Ⅲ 生徒指導　Ⅳ 進路指導　Ⅴ 地域連携・PTA）
評価（A よくできた　B できた　C あまりできなかった　D できなかった）

| 分掌 | 分野 | 評価項目・達成目標 | 評価 | 振り返り・課題 | 改善策 | 学校関係者評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 総務 | Ⅰ | 年間行事の精選と生徒の主体性を育む行事の充実、地域の教育資源の有効活用を図り、生徒が通っていて良かったと思える学校づくりに努める。 | A | 計画していた行事について、天候の関係で日程の変更があったが滞りなく実施ができた。 | 学年行事・生徒数が減少するなかで、できる方法を考え、教育活動上、より有益な学校行事の実施・改善を検討する。 | |
| | Ⅰ，Ⅴ | 防災避難訓練を実施し、自他の生命を尊重する態度と主体的に行動する力を身に付けさせる。また、地域の避難所としての役割を意識させる。 | A | 幼・小・中・高・地域合同避難訓練として、自衛隊・消防署などの各関係機関や地域と連携し、炊き出し訓練をはじめとする様々な活動を行うことができた。早期から幼・小・中の担当者と計画をたてることができた。 | 引き続き実効性のある訓練となるように各校や関係機関の担当者と情報を共有しつつ連携を高める。 | |
| | Ⅴ | 地域の関係機関をはじめ、PTA・同窓会・地域連携支援協議会等と連携して、地域に根差した学校づくりを推進する。 | A | 多くの地域の方に学校行事等に参加していただくことができた。 | 周知を徹底し、積極的参加を促す手立てをとる。 | |
| 教務 | Ⅰ | 生徒の実態や進路希望を踏まえ、本校の個性を活かした教育課程を構築することで、生徒一人ひとりの持つ力を最大限に引き出す。 | A | 教科担当と担任との日常的な情報共有・協議を通して、生徒の実態や進路希望を踏まえた本校らしい教育課程の運用に努めることができた。 | 教科担当と担任が連携し、主体教務部で定期的に協議を行うことで、時代や生徒のニーズに応じた教育課程を編成する。 | |
| | Ⅰ | 少人数指導や習熟度別授業を活用し、生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導を行うことで、基礎学力の確実な定着と応用力の育成を両立させる。 | A | 少人数授業や習熟度別授業を継続して実施した。加えて、寄宿前の補習や個別支援を通して、成績不振者が少ない状態を維持でき、成績優秀者数についても昨年度同様の高水準だった。<br>また、資格取得を目標に主体的に学習に取り組む生徒も現れ、英語検定準２級を取得する生徒が出るなど、個々の努力が具体的な成果として表れた。 | 今後も、生徒の状況に応じた指導を継続していくとともに、寄宿前補習や個別支援を含めた支援体制の充実を図り、良好な学習状況の維持に努めていく。<br>また、資格取得など目標を持った学習に取り組む生徒の動きを広げていくため、教科指導と関連付けた情報提供や働きかけの方法について検討を進める。 | |
| | Ⅱ | 進学・就職それぞれの進路に対応した力を育成するため、各類型の特性に応じて授業内容を柔軟に見直し、生徒の進路実現に直結する学力の定着を図る。 | A | 生徒ごとの特性に応じた授業内容の工夫に継続して取り組んだ。学期ごとに学力状況の分析を行い、成績不振者の減少につなげることができた。また、成績上位層の育成についても一定の成果が見られ、進路実現に直結する学力の定着という点で、安定した成果を上げることができた。各教科・学年での取組が定着し、日常的な教育活動として機能している。 | 学年や教科と連携し、家庭学習の定着や学習時間の確保を促進するとともに、学習意欲の向上に努める。 | |
| | Ⅱ | 一人一台端末や各種ICT機器を効果的に活用し、授業の質を高めるとともに、学習活動の効率化と個別最適化を図る。 | A | 課題の提出・添削や学習状況の把握など、日常的な教育活動の中でICTが活用されることで、授業運営や指導の質の向上につなげることができた。また、教科の授業に加え、総合的な探究の時間においてもICTの活用が定着し、様々な学習活動や探究活動の効率化に寄与した。<br>また、ICTを活用した実践が教員間で共有され、指導方法の工夫が進んだ。 | 校内研修や公開授業等を通して、ICTを効果的に活用した授業実践の共有を継続し、教員一人ひとりの指導力向上につなげていく。あわせて、授業改善の視点から、ICT活用の目的や効果を整理し、教育活動全体の質の向上を図る。 | |
| 生徒指導 | Ⅰ | いじめ認知を強化し、生活環境の正常化を図る。 | A | 生活実態調査において報告・相談したいことがある場合はもちろん、学校生活が楽しくない・あまり楽しくないを選択した場合は当日担任から必ず声掛けをし、必要であればスクールカウンセラーに繋げた。また、教員間で気になる生徒がいた場合も生活実態調査結果共有会議で共有ができた。 | 生活実態調査内容の見直しを行い、生徒がいつでも報告・相談でき、安心安全な学校生活を送れるような環境づくりをする。些細な変化でも気づき、学年等に共有する。 | |
| | Ⅰ，Ⅲ | 交通安全に係る規範意識を高める指導を行う。 | B | 兵庫県警による交通安全講話を１回実施し、特に令和８年４月に改訂される自転車の法令ついての学びを深めた。今年度も自転車の大きな事故についての報告はなかった。ヘルメット着用率が低いのが課題である。 | 全国交通安全運動期間に合わせてポスターを生徒昇降口や教室に掲示する。また、令和８年４月から自転車の何が法改正されたのかが分かるようにクラス掲示をする。 | |
| | Ⅰ，Ⅳ | 「挨拶、返事、報告、連絡、相談、お礼、お詫び」の実践を推進する。 | B | 各委員会の目標を掲示することや生徒会活動の様子、部活動の様子等を掲示することができた。習慣化できなかったことが課題である。 | 年間スケジュールを用いて、掲示予定を立てることで習慣化を目指す。 | |
| | Ⅰ，Ⅲ | 地域行事やボランティア活動に積極的参加を促す。 | B | 募金活動（生徒会）、港の清掃（全校生）、姫路城一斉清掃（希望者）を実施した。それぞれの活動目的や意味をさらに伝達し、ふるさと意識等を高めたい。 | 地域清掃は年間予定に入っているため、３回実施を目標にできたが、募金活動は予定に入っていない。事前に生徒会で予定を立てることで実施回数を増やす。 | |
| 進路指導 | Ⅰ，Ⅳ | 進路未決定者を出さない。 | B | 進路指導部と３学年で密に連携を取り、情報共有をおこなうことができた。 | 今年度得られた知見及び人脈を来年度の進路指導に活用し、継続した進路実現を達成できるように努める。 | |
| | Ⅳ，Ⅴ | インターンシップでの体験を通じて、職業観を身につける。 | A | 夏休みを利用して、２年生全員が「企業インターンシップ」と「トキメキ仕事体験」に参加することができた。 | ２年生の間から「働くこと」に関して意識づけをおこなうことができた。しかし、こちらからのアプローチがないと厳しいので積極的に生徒が働くような進路選択が課題である。 | ・温かで落ち着いた学校の雰囲気が感じられ、先生方の日頃のご指導に感謝する。 |
| | Ⅰ，Ⅳ | 企業や大学の情報などを生徒に伝達し、進路指導室の活用を促す。 | B | ３年生の夏休みなど限られた期間でしか生徒の利用はなかった。オープンキャンパスの情報など広く生徒に進めることが難しかった。 | 生徒が困ったときは進路指導室に立ち寄るという雰囲気づくりから必要だと感じたので活用されるよう整理していきたい。 | ・船舶免許やマリンスポーツの資格など普段の学びが資格取得という生徒の自信となる成果につながっていることが素晴らしい。 |
| 保健 | Ⅰ | 自身の健康に関心を持ち、主体的に健康な生活を送ることができる心と体を育む。 | B | 全健診項目の受検を達成することができた（家庭での個別受診を含む）。受診勧告をした生徒へ個別に指導し、受診につながるように努めた。心と体の健康について幅広い分野の内容を掲載した「ほけんだより」を毎月発行することができた。<br>生徒の健康課題についても興味をひく保健掲示の作成ができた。 | 今年度の健診受診率の精査を自校可能な診療科は引率し受診する。長期休暇前に保健委員から受診の啓発をおこなう。 | ・入学から卒業まで、１人も欠けることなくなく３年間をすごせていることは、先生方の丁寧な関わりによるところが大きい。 |
| | Ⅰ | 学校安全に対する意識を高め、学校事故防止と緊急時対応の充実を図る。 | A | 年度初めに「学校保健安全の手引き」の周知と健康上配慮が必要な生徒の情報共有を行い、救急体制の共通理解を図ることができた。また、生徒・職員を対象にＡＥＤ・心肺蘇生講習会を行い、一層の緊急時救急体制の充実を図ることができた。安全点検については２ヶ月に一度行い、結果を職員会議等で周知した。12月には、学校産業医とともに施設の安全確認を行った。 | 今後もAED・心肺蘇生法講習会を開催し、万が一に備え冷静な対応ができるように研修を重ねる。 | ・ウエイトリフティング部を中心に部活動においても、閉校となる来年度に良い結果が出ることを期待する。 |
| | Ⅰ | 学習面や対人関係などに困難を抱え、支援を必要としている生徒がよりよい学校生活を送ることができるよう、支援体制の充実を図る。 | A | カウンセラーの面談が継続的に必要な生徒が多く、学校や家庭での様子、生活習慣の改善など相談内容が幅広い中、個々のニーズに合わせた対応ができた。来年度も積極的な活用を促したい。 | 来年度も積極的にキャンパスカウンセラーを活用し、生徒の個々のニーズに合わせた対応や配慮をしたい。場合によっては心のサポート委員会や特別教育推進委員会を実施する。 | |
| 図書（総務） | Ⅰ | 図書委員を中心に図書室を主体的に運営する。 | A | 図書委員全員で図書室を主体的に運営することができた。図書便りの発行も昨年度より多くできた。 | 図書委員が中心となって様々な活動を積極的に行い、利用しやすい図書室を作り上げる。 | |
| | Ⅰ | 図書室の利用を活性化する。 | A | 新しい図書の購入や朗読書、ビブリオバトルの実施が一因となり、全校生の図書室利用と年間貸出総冊数70冊を達成できた。昨年度の15冊を大きく更新できた。 | 新しい図書の購入やイベント企画を通じて、利用しやすい、利用したい図書室をめざす。 | |
| | Ⅰ | 図書委員全員で書架の整理を行い、多目的に利用しやすい図書室にする。 | A | 古い図書を廃棄するなどして、書架の整理をし、自習、ミーティングなどの目的でも活用できた。また、授業で使用することもあった。 | 授業での補習や部活動などの集団で、図書室で勉強をする生徒を増やすための工夫を考えていきたい。 | |
| 人権（総務） | Ⅰ | 人権ＬＨＲの取組をさらに充実させる。 | A | １学期に学年ごとのテーマ、２学期に学校全体で人権LHRを実施することが出来た。 | 今年度は短期間題について考え、保護者の方とも話し合いをする機会を設けることができた。 | |
| | Ⅰ | 学年だけでなく、学校全体で生徒の状況を見守る。 | A | 面談とキャンパスカウンセリングとの教育相談を指標通り行うことが出来た。 | 継続して行っていく。 | |
| | Ⅰ | 教職員の人権意識向上を図る。 | B | １学期と２学期の人権LHRの結果を職員全体で共有する場を３学期に設ける予定である。 | 来年度は人権講演会を実施したい。 | |
| 2学年 | Ⅰ，Ⅲ | 毎月生徒自身が目標設定をし、自己評価を行う。自他を尊重し、集団を構成する一員として一人ひとりが主体的に動けるクラスをつくる。 | A | 毎月目標設定をし、振り返りや自己評価ができた。また、目標をクラス掲示することでさらに意識づけができ、お互いに声かけをする場面も見られた。修学旅行等の学校行事を通して自他を尊重する心や安心して過ごせる雰囲気が形成された。 | 来年度も目標設定・自己評価を行い、継続して取り組む。目標を設定し努力することでさらに大切さ、目標を達成できなかった時に次どうするのか等考える力の育成をし続ける。 | |
| | Ⅰ，Ⅳ | 将来を考え、具体的な目標を持ちそれに向けて努力する力を養成する。 | A | 就職希望者はもちろん、進学希望者も含めて全員がインターンシップに参加した。実際の職場での経験を通じて、職業に対する理解が深まり、将来に向けた具体的な目標を持つきっかけとなった。今後は各種検定等の取得やボランティア活動への参加を積極的に勧めたい。 | 来年度は進路決定する重要な年であることを意識させ、日々の学校生活の取り組みはもちろん、検定やボランティア活動等の幅広い経験が将来の学びやキャリアにどのように役立つかを認識させ、進学と就職の両方に対する意識を高める。 | |
| | Ⅱ | 学習習慣の確立を図り、基礎学力を身につけさせる。主体的に学ぶ姿勢を養成する。 | B | 遅刻欠席が少なく、前向きに学習に取り組んでいる生徒が多い。授業中のペアワークやグループワークで積極的に意見を出し合い、高め合い、深め合いをする様子もみられた。 | 提出物が出にくい生徒が一定数いるため、常に声かけや放課後に一緒に取り組む等の支援をする。 | |
| 3学年 | Ⅰ，Ⅲ | 挨拶や返事、時間を守るといった基本的な生活習慣を身につけさせ、日常生活の中で規律ある行動を定着させる。加えて、生徒が安心して過ごせる人間関係を築き、互いに支え合いながら成長できる学級づくりを目指す。 | B | 基本的な生活習慣については、生徒一人ひとりが高い意識を持って取り組む姿が見られ、学年全体として規律ある行動が定着した。互いに声を掛け合いながら過ごす姿も多く、生徒が安心して学校生活を送ることのできる雰囲気が学級内に醸成された。<br>一方で、欠席が非常に多い生徒もおり、学年としての生活の安定が進む中で、個々の生徒の状況に応じた継続的な対応が必要となった。 | 欠席が継続的に見られた生徒については、担任や関係部署が連携し、早い段階から本人および保護者と繰り返し話をしてきたが、状況の改善につなげることが難しかった。<br>家庭との共通理解をより丁寧に形成していくための働きかけの在り方について、改めて検討する必要がある。 | |
| | Ⅱ | 卒業後の進路を見据え、生徒が目の前の課題に対して主体的に向き合い、自ら考え、試行錯誤しながら粘り強く解決へと導く力を育成する。 | A | 多くの生徒が目の前の課題に対して主体的に努力を重ね、困難な場面に直面しても簡単に諦めることなく取り組む姿が見られた。特に、総合的な探究の時間の活動においては、未知の課題に対して各自が試行錯誤しながら粘り強く取り組むことができた。 | 目の前の課題に粘り強く取り組む姿勢を育むことができた一方で、そうした力を日常の学習や各教科の学びに結び付けていく工夫を検討したい。 | |
| | Ⅳ | 一人ひとりが自身の進路目標を自覚し、その実現に向けて日々の学校生活や学習に計画的かつ主体的に取り組めるよう支援する。 | B | 生徒一人ひとりが自身の進路目標を自覚し、自身の進路に対して責任をもって真摯に粘り強く努力する姿が見られた。進路決定後も易きに流れることなく熱心に学習活動に取り組んだ。<br>一方で、欠席が多い一部の生徒については、進路意識の形成が十分とは言えず、進路未定となっているケースも残った。 | 学校生活への関わりが不安定な生徒については、進路意識を高め、行動の継続につなげることの難しさが課題として残った。<br>日常的な登校や学習への参加といった基盤が進路意識の形成に大きく影響することを踏まえ、より早い段階から生徒・家庭と方向性を共有する必要性がある。 | |